

## 織田信長 天正4年正月の夢 — 安土に国際都市を実現

太田牛一『信長公記』とイエズス会『1581年日本年報』より

奥 正敬

織田信長の側近の一人とされる太田和泉守牛一が著した『信長公記』の天正4(1576)年の記述によると、信長は譜代の部将である丹羽秀長に対し、1月中旬から近江の地、安土の城の着工に取り掛かるよう命じています。この頃、足利幕府は既に無く、信長の勢力圏は、東は盟友徳川家康の三河から尾張、本拠の美濃より南は伊勢、さらに北は若狭、越前、加賀、そして西は京の都や近江など畿内の多くの地域に及んでいました。また、信長は前年に家康と共に長篠の合戦で武田勝頼を破っており、対峙していた大坂の石山本願寺とは一時ながら、和睦が整った時期でもありました。

### 『信長公記』にみる安土

『信長公記』には信長が2月23日に安土に入り、普請に当たっていた丹羽秀長の労を称えると共に、早々に馬廻り衆に屋敷地を与え住居の建築を命じていたことが記されています。また、信長は4月1日から天主閣の建築に取り掛かり、前述の各地から大工や石垣職人など多くの技術者を集めていました。安土山や近隣の山々から多くの大石を切り出して石垣を築き、中には1万人の人足を使って琵琶湖の湖面から高さ約100メートルの安土山へ引き上げたことも有ったとされています。特に、瓦は唐人の「一観」という人物に焼かせて、自らの憧れであった唐様の大天主閣の建築を命じています。

こうして安土山に城郭作りが進む中、山の麓には家臣が競って豪華な屋敷を作り、この年内には多くの民家が建築されていたとも書かれています。また、安土周辺の山々や琵琶湖の様子も述べられ、城下東の観音寺山の山麓には街道が通り、往来の人びとが絶えないことなどが記されています。

安土城の天主閣が完成するのは、この後3年を経て天正7(1579)年のこととなります。本書『信長公記』では、7層から成る内部の様が見事であることを、各層ごとに作りや室内を飾る絵画をもって説明しています。その中には狩野永徳とその一門に命じて描かせた梅の墨絵をはじめ、儒者や七賢などの絵画も見られ、信長がここでも唐様にこだわったことを示しています。

城下の掘割や船着場、道路が完成するのは翌天正8(1580)年のこととなりますが、その面積や規模などの数値に関しては殆んど記載されていません。

### 『1581年日本年報』にみる安土

この安土城に天主閣が完成した2年後の天正9(1581)年の安土の町を記述していた外国人がいました。この人は、キリスト教宣教師で名をガスパル・コエリュと言ひ、イエズス会の初代の日本準管区長を務めていました。彼は1581年のわが国の社会情勢や布教状況を書きまとめ『日本年報』として、イエズス会総長に報告していたのです。また、この報告書はルイス・フロイスによって後に書かれる『日本史』と同じ内容の記述も見られ、その資料になっていたものと考えられます。



ガスパル・コエリュの「1581年度日本通信」が掲載された『イエズス会日本通信』(エヴォラ、1598年)本学図書館所蔵。

彼はこの年報にある「安土山の修道院および司祭館について」の章の冒頭で、信長が「12、3年前から同市(安土)にて日本を統治している」と述べています。これは、太田牛一が『信長公記』に記す「天正4年の2月23日」の信長の安土入り説を否定することになります。しかし、この報告書が作られた年である天正9(1581)年より12年前の永禄12(1569)年は、信長が伊勢を平定した年にあたり、さらに13年前の永禄11(1568)年は岐阜城を居城とした翌年です。そして、近江の六角承禎を退けながら足利義昭を奉じ上洛した年にあたります。信長がこのような時期に、未だ治安の不安定な近江の地、安土に本拠を構えることは難しいと考えられます。

こうした疑問はあるものの、コエリュは安土が都から14里離れていること、長さ24里、幅5~6里ある湖に臨む、広大な平野の中にある山の麓にあること、その山に信長が、壮麗かつ難攻不落の城を築いて栄華と威勢を誇示していること、また、山麓の城下には広く真っ直ぐな道路があり、5千名から6千名の人口があることなどを説明しています。さらに、信長の配下の